

タイトル:2022 年度 教育セミナー (第 18 回)

日時:2022 年 9 月 15 日(木)~18 日(日)

ハイブリッド開催

「16 世紀末オスマン朝宮廷における宦官の派閥形成について—白人宦官長ガザンフェル・アアの事例を中心に」

松本 和希(九州大学大学院人文科学府 歴史空間論専攻 イスラム文明史学専修 修士 1 年)

本年度の中東☆イスラーム教育セミナーは、対面を含めたハイブリット形式で実施されました。私は 3 日目(9 月 17 日)に発表の機会をいただきましたが、オンライン上の発表は「場の空気」を掴みづらく、やりにくいと感じていた私にとって、ハイブリット形式での開催は非常に僥倖でした。そして、このような発表の機会を与えて下さった AA 研の先生方や千葉さまには、この場を借りて改めてお礼を申し上げます。以下、僭越ながら私の感想と評価について述べさせていただきます。

まず、上述しましたように、本年度は 3 年ぶりに「対面あり」での開催であったために、普段接することのできない政治学や社会学を専門にされている同年代の方々との交流が、非常にスムーズにできたと感じました。発表に対する質問は、普段受けている質問とは異なる視点や角度からのものであり、私自身の今後の研究に対して、刺激的な物となりました。また、4 日という短期間のセミナーではありましたが、積極的に受講生同士が話し合えるように昼食の場として所内の部屋を開放して下さいったことも交流を進める潤滑油となったのではないかと、思います。

私は、今回「16 世紀末オスマン帝国宮廷における宦官の派閥形成について:白人宦官長ガザンフェル・アアの事例を中心に」と題し、立命館大学へ提出した卒業論文をベースに発表しました。本発表で、16 世紀末に約 30 年にわたりオスマン帝国の宮廷内で強大な権力を有したガザンフェル・アアがいかに派閥を形成したのか、という疑問を持ち 1 人の役人との両者のコネクティビティーを中心に検討しました。外部に向けた初の発表ということで、初めは非常に緊張していましたが、皆さまが真剣に発表を聞いて下さり、その後の質疑やコメントで有益で今後の励みとなるようなお言葉をいただきました。とりわけ、オスマン帝国史をご専門とされている高松先生からのレジュメや資料編に対する的確な指摘は、用語や資料の見せ方、どのように視点を置けばよいか、といった我が身を顧みる重要なものでした。

そして、先生方の講義はいずれも非常に興味深いものでした。とりわけ、初日の長縄先生のご講演は、4 日間の全ての発表・講演に通底したものであると同時に、これからどのような姿勢で研究に向かい合うべきか、という指針を示していただいたものであるように感じました。特に広範かつ深淵を覗くように深い研究を構築するためには、読書の食わず嫌いをするのではなく、何に対しても貪欲に吸収する必要があるということ、は大変耳の痛い話でした。また、3 日目の高松先生は、我々には馴染み深い図書館をテーマに図書館を寄進することについてご講演されました。このテーマは、私が専門とする宦官も大きく関わるテーマとして、私も大いに興味深く拝聴させていただきました。加えて、先生方がこれまでどのような研究人生を歩んでこられたか、普段はお聞きする事ができな

いような話もセミナーならではの貴重な経験でした。

昨今のコロナ禍によって、研究の制限だけでなく研究者同士の交流も限られるようになりました。しかしその反面、コロナにより、オンライン普及が急速に進められ、今まで以上に多くの人に参加できる状態となりました。来年度は、コロナがどのような状態となっているか分かり得ませんが、今年度と同じようにハイブリット形式で開催されることにより、多くの人に発表や受講の機会が与えられることを切に願っております。

最後に、4 日間のセミナーを円滑に進める手助けをしてくださった千葉さま、ご講演や私の拙い発表にご質問してくださった AA 研の諸先生方、講師の先生方に、お礼を申しあげ私の感想を述べたいと思います。